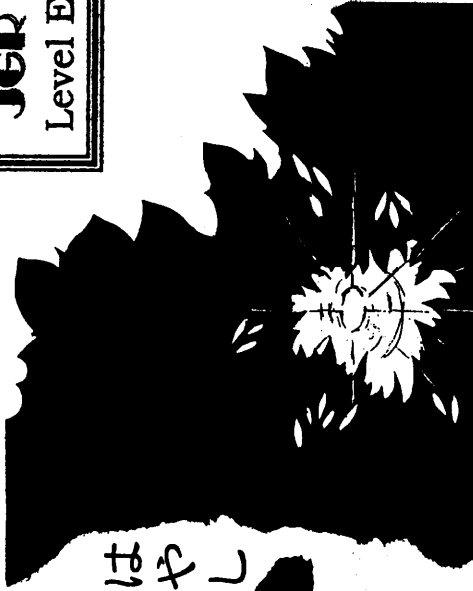


JGR
Level E



はやし
おん
林盤

原作 芥川龍之介「藪の中」

真話 酒井真智子

挿絵 馬越 智子

京都の北には山があります。

そして、その山のもっと北には
海があります。京都からその海まで
大きい道があります。それは人々が
海で取れた食べ物やめずらしい物を
京都の町へ運ぶ時、
北の町の人々が京都の新しいことや、
大切なことを知るために行ったり来たり
する時に通る道です。



もちろん京都は国の一番大切な町ですから、この北へ行く道だけではなくて、
たくさんの道が西へ、東へ延びていました。このように大きな町と町を結ぶ
道を街道と言います。

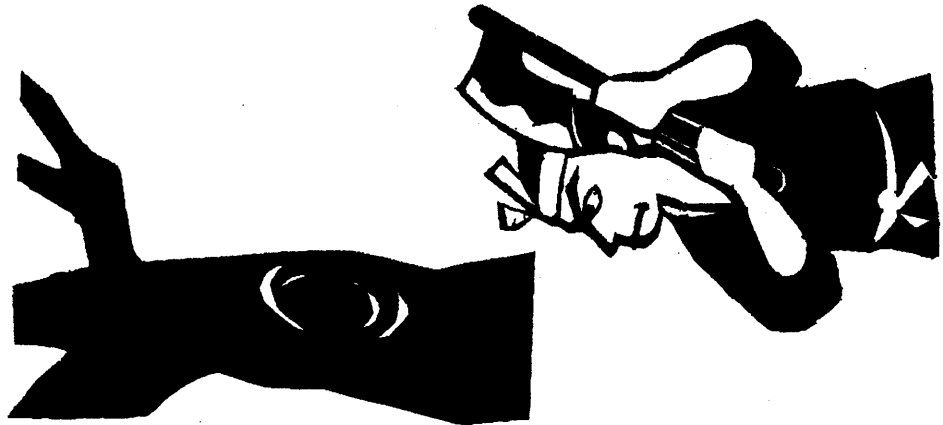
ある日、この北の街道の近くの山で働く人が男の死体を見つけました。
この人は山の木を切るのが仕事です。建物や橋を作るための木を切るのです。
この仕事をする人を木こりと言います。この木こりは死体を見つけると急い
で放免に知らせました。放免というのは今の警官と同じような仕事をする人
です。放免は死体を調べてみて、この男は誰かに殺されたようだと思つたの
で番所に知らせました。番所と言うのは今の警察と同じ様な所です。番所で

は侍が警察の仕事をしています。侍は簡単に言うと国や町の人々のために仕事をする人です。番所の侍は死んだ男の人が殺されたのかどうか、事故で死んだのかもっと詳しく調べるために、いろいろな人から話を聞くことになりました。話を聞くために番所に呼ばれたのは五人です。死体を見つけた木こり、この男が生きている時に街道で会ったお坊さん、泥棒を捕まえた放免、殺された男の妻の母親、泥棒の多襄丸です。

- 3 -

死んだ男の人を見つけた木こりの話

「ええつと、それは杉のたくさんある所へ木を切りに行くところでした。」



私は木こりですからね

- 4 -

山で木を切つて町や村へ運ぶんです。

今は京都の東の方で大きなお寺を

建てていて、たくさん木が

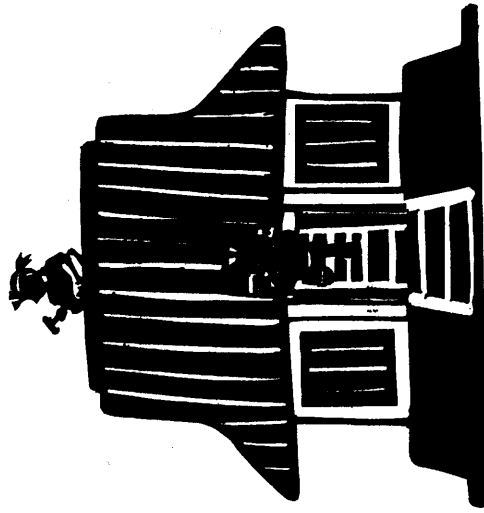
必要なのだそうですよ。

あ、いいえ、杉林の中ではありません、

男の人を見つけた場所は。街道から

山の中へ入つていくと竹の林があるんです。

その林は人がやつと通れるぐらいたくさんの竹があつて、それが高く伸びて
いるから昼でも光が入らなくて暗い所なんです。



私はいつも林の中で木を切っているのに、なんだか怖くなるくらい
暗くて気持ちが悪い所でなので、急いで通り過ぎるようにしているんです。
その竹の林を通り過ぎると少しだけ明るい所に出るんです。そこは低い木
がいっぱいある所で、お日さまの光が入ってきますから、ちよつとほつと
するんです。私が木を切る所は、もう少し先です。杉の林があつてその中
にあるんです。だけど、昨日は低い木のある明るい所で男の人を見たんで
すよ。初めは木の下で寝ているのかなと思つたんです。だけど近づいて見る
と古くなつた魚のような嫌な臭いがして、大きな蠅が周りを飛んでいるので
『変だな。』と思つたとたんに気が付きました。

『あつ、この男の人は死んでいるんだ。』それで
急に足がガクガク震えてしまいました。
でも私は死んだ人を見るのは
初めてではありません。木こりは
高い木に登つて切ることもあります
から、落ちて大怪我をしたり死んで
しまつたりすることもあるんです。
ですから段々に落ちて着いて男の人
を見るのが出来ました。上を向いて



寝ているようでした。

男の人は烏帽子をかぶつて、空色の着物とそれから袴をはいていました。
烏帽子は侍がかぶる物ですから、それでこの男の人は侍なんだと分か
りました。胸の所に刀のような物で深く切られたような傷がありました。
そこからたくさんの血が出たらしく、空色の着物が赤黒くなっていました。
お侍の周りに落ちていた木の葉にも血がついていました。」

「いいえ、刀は見ませんでした。お侍の倒れていた所に大きい杉の木が
あるんですが、その木の下に紐が落ちていました。

そうだ、思い出した、そのお侍からちよつと離れた所に櫛が落ちていた

んですよ。一本だけです。女の人が使う物だと思います。何でこんな所に女の人の櫛が落ちているんだろうと思っただんです。

変でしょう、だってあんな林の奥に

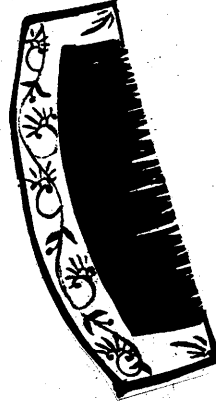
女の人はいきませんからね。」

「他に気が付いたことですか、

そうですね・・・えーつと、

お侍が寝ているように倒れていたんですけど、

それなのに周りの草や木の葉が足で蹴られたり、踏まれたり、倒されたりしていたんですよ。それを見ると、お侍は誰かと喧嘩をしたのか動き回った



りしたんじゃないかと思えます。切られて死んだのなら、苦しんでいたんでしようが・・・静かに寝ているようだったんですよ。」

「あつ、もう終わりなんですか、それじゃあ帰ってもいいんですね。ありがとうございます。私がこんなことを言う必要もないことでしょうが、あのお侍はまだ若いのに死んでしまつてかわいそうです。

目が開いたら、そのきれいな目に青い空が映つて気持ちよさそうに見たのではないのでしょうか。

もし誰かに殺されたのなら、早く殺した悪い人を見つけて下さい。」

「私ですか、いいえ、まだ仕事が終わらないので家には帰れません。この

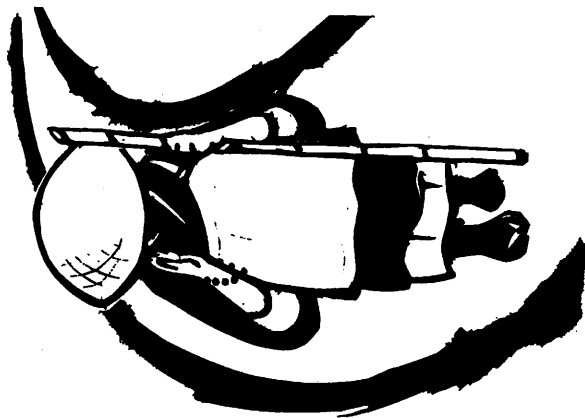
仕事が終わったら今度は南の方の山で木を切るんです。やはりそちらの大きな町でお寺を建てるそうで……。木が必要な所はどこでも行きます。それが木こりの仕事ですからね。それでは失礼いたします。」

木こりが帰った後、番所にはお坊さんが呼ばれました。北の街道を京都に向かって歩いていく時に、侍を見たというのです。お坊さんはお寺の人です。

お寺で人のこと、木や花や動物のこと、世の中のこと、神様のことを考えたり、勉強したりします。それからもつと世の中のことを知るために旅をしたりします。

山道を歩いていたお坊さんの話

「あのお侍さまには二、三日前に会ったばかりでございます。亡くなられたんですか、とても信じられないことです。殺されたかもしれないなんて……。おかわいそうなことでございます。」



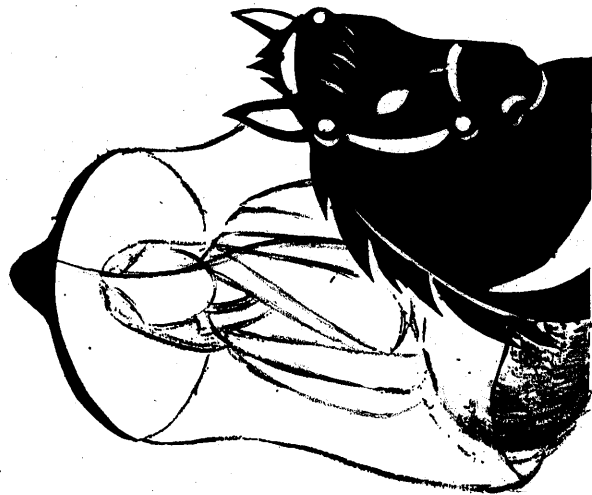
どうぞ静かな気持ちであちらの世界に行くことができますようにお祈り申し上げます。」

「はい、お侍さまに会ったのは一昨日のお昼ごろでした。会った所は京都の町から少し離れた北の街道です。私は北の山の方から町へ向かって歩いていました。道のそばには野菜や花の畑がありました。お二人は京都のほうから山へ向かっていらつしやいました。」

「はいそうです。お侍さまはお一人ではなくて馬に乗った女の人と一緒に歩いていらつしやいました。」

「お二人の様子でございませうか。お一人を見たのは本当に少しの間だけで

すからあまりよく覚えておりませんが、できるだけ思い出してお話いたします。女の方は旅行をする時の大きな帽子のような物をかぶっていました。



そして帽子の上のところから薄い布が掛かっていました。その布があるので

女の人の顔は見えませんでした。」

「着ている物ですか、そうでございますね・・・きれいな薄い緑色や黄色
だっただと思います。下のほうに赤い色と紫色もあつたような気がします。」

申し訳ありません、私は今、旅をしながら立派なお坊さんになる勉強を
しているところなのです。いつもお寺のことやえらいお坊さんのことばかり
考えて歩いているので、他のことに注意ができないのでございます。」

「馬ですか、馬の毛の色は少し赤い茶色でした。大きさは背中から足まで
が一メートルと三十センチぐらいだっただと思います。大人しそうな馬でした
よ。」

「刀ですか、お侍さまは刀を腰の左側に付けていました。」



弓と矢も背中に付けていました。矢は……、そうですね、二十本くらいあったと思います。」

「着物ですが、確か空色だったと思います。頭には何か黒い帽子をかぶっていました。烏帽子というのですが、そうですか、名前は知りませんでした。」

「お顔は若いきれいな、でも弱々しい感じではなかったと思います。そのぐらいしか覚えておりません。何しろほんのちよつとの間だけでしたから。」

「申し訳ございません、あまりお役に立たなくて……。」

お坊さんの話はこれだけです。

番所を出てからお坊さんは『あんなに若くて立派なお侍さまが亡くなつ

てしまうなんて、本当に人の命は朝開いて昼には落ちてしまう花のようなものなのだなあ。生きている時間と夢の時間は同じようなものなのかもしれない。でもそれを悲しいと思うのはまだまだお坊さんの勉強が足りないからなのだろう。』などと独りで言いながら山の方へ歩いて行きました。

三番目に番所に呼ばれたのは放免です。初めにも説明しましたが、放免というのは今の警官のような仕事をする人です。

この放免は泥棒を捕まえました。泥棒の名前は多囊丸といいます。多囊丸は京都の北山で人の物を盗んだり、刀を振り回してたくさんの人に怪我をさせたり、家に火をつけたり、人を殺したりしているので怖がられていました。

ですから捕ま^{つか}ったと聞^きいた人々^{ひとびと}は驚^{おどろ}き、そして喜^{よろこ}びました。

多^た襲^{じょう}丸^{まる}を捕^{つか}まえた放^{ほう}免^{めん}の^{はなし}話

「多^た襲^{じょう}丸^{まる}を捕^{つか}まえることができたのは運^{えん}がよかつたからなのです。あの男^{おとこ}は怪^け我^がをしていましたからね、馬^{うま}から落^おちたよう^{よう}で動^{うご}けなかつたんです。骨^{ほね}でも折^おれているでしょう。

あの泥^{どろ}棒^{ぼう}は、北^{きた}の街^{かい}道^{どう}を旅^{たび}する人^{ひと}から荷^{にも}物^{ぶつ}を取^とつていたんです。あそこは京^{きょう}都^とから北^{きた}山^{やま}の向^{むか}い^への海^{うみ}の町^{まち}まで続^{つづ}いている道^{みち}ですから、大^{たい}切^{せつ}な物^{ぶつ}が運^{えん}ばれます。多^た襲^{じょう}丸^{まる}は力^{ちから}も強^{こゝろ}く乱^{らん}暴^{ぼう}ですから、人^{ひと}の荷^{にも}物^{ぶつ}を取^とるのは簡^{かん}単^{たん}でした。

その上^{ええ}、頭^{あたま}がよくて走^{はし}るのが
速^{はや}かつたのでなかな^なか捕^{つか}まえられ
なかつたんです。昨^{きのう}日は、近^おくの村^{むら}に
住^すんでいる人^{ひと}が誰^{だれ}か怪^け我^がをして
動^{うご}けないでいるから見^みてくれと
知^しらせて来^きたん^です。それで、行^いつて
見^みると村^{むら}の近^おくの橋^{はし}の上^{うえ}で怪^け我^がをして
苦^{くる}しんでいる男^{おとこ}がいたんです。顔^{かお}を
見^みて驚^{おどろ}きました。



捕まえようと思つてもなかなか捕まえることが

できなかつた多襄丸だつたんです。ずいぶん

汚れた着物を着ていましたよ。

紺色だつたと思います。

刀を持っていました。古いけれど

よく切れそうな刀でしたよ。

それから弓と矢も持っていたんです。

弓には革が巻いてあつて、りっぱな

物でした。矢は十七本ありました。



きれいな鳥の羽がついていました。

これは多襄丸の物ではない

と思いましたよ。きつと誰かから

盗んだに違いないですよ。本当に悪い男だ。」

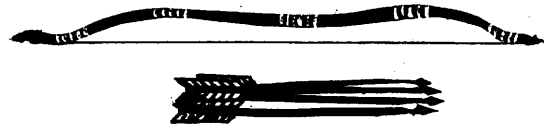
「はい、馬もいましたよ。橋のそばで草を食べていました。色は少し赤い

茶色でした。その馬から落ちたのかな。たぶんその馬も多襄丸が誰かから盗ん

だ物なんでしょう。盗んだ馬から落ちて大怪我をして捕まってしまうなんて、

はつ、はつ、はつ、悪いことをすればいつか悪い結果が返ってくるんでしょ

うね。」



「お侍さま、京都には他にもたくさんの泥棒がいます。でも多襄丸はそ
中でも一番悪い泥棒だと言つてもいいぐらいです。

この男は女の人に乱暴をするのが好きなんです。

去年の秋でしたが、

京都のお寺に来た若い母親と

その赤ん坊が殺されたことが

あつたんです。多襄丸が

その場所から逃げて行くのを

見た人がいるんです。



母親は乱暴されても赤ん坊を守ろうとして、刀で切られたようです。胸に

小さな赤ん坊を抱いて死んでいる様子は、本当にかわいそうでした。いろい

ろな事件を見ている私でも涙が出てしまいましたよ。昨日、仲間の放免が

お侍さんの死んでいるのを見たと言っていました。多襄丸が持っていたの

はそのお侍さんの弓と矢ではないのでしょうか。前の日には女の人と一緒に

だつたそうですね。多襄丸がやつただつたら、徹しく調べて女の人を探し

てください。私も急いで山の方へ戻つて探してみましよう。」

放免が帰つた後、番所に呼ばれたのは中年の女の人でした。この人は死ん

だ侍と一緒に歩いていた女の人のお母さんです。

番所の侍は持ち物に書いてあった侍の名前から、知っている人を探したところ、侍の妻の母親が京都に住んでいることが分かったのです。

侍と歩いていた女の母親の話

「そうでございます。あの方は武弘様でございます。去年私の娘と結婚した武弘様です。どうして・・・どうしてこんなことになったのでしょうか。娘は、娘の方はどうなったのでしょうか。死んだのでは・・・。」

娘の夫が亡くなったのですから、すぐには落ち着いて話すことができませんでした。しばらくして番所の侍の質問に答えて話し始めました。

「はい、あの方は金沢武弘様でございます。いいえ、京都の方ではございません。北山の向こうの若狭の国の侍でございます。

年は二十六歳でございます。

金沢家は若狭ではとても古い立派な家で、お父様は国の大切な仕事をなさっていらつしやいます。

武弘様も優しく、真面目な方です。娘もそう言っております。お友達もたくさんいて誰も悪く言う人はいません。刀も上手に使える方でした。でも刀を使って喧嘩をしたり、人と競争したりすることが嫌いなようでした。それで、刀の試合の時など気持ちが優し過ぎてどうしても勝つことができな

「いのだそです。娘はいつも残念だと言っていました。」

「娘でございますか。娘は真砂と言います。歳は十九歳でございます。」

小さい時から元気で気が強く、主人も真砂の兄達も『真砂は男の子だったらよかつたのに』と言っていました。

武弘様との結婚の時も、他の娘さんたちは御両親が決めた方と何も文句を言わずにお嫁に行きますのに、真砂は自分で決めたのですよ。お友達のお兄様の出られた馬の競走会で会ったのだそです。

娘はその競走会から帰って、武弘様と結婚したいと申したのです。私たちは驚いたのですが、どうしたことが、武弘様も面白い娘さんだと気に入る

てくださって、とうとう結婚することになったのが去年でございます。

本当に幸せそうな一人でしたのに……。」

母親はまた思い出して泣き出したため、話すことができなくなりました。

「すみません。娘のことが心配でございます。はい、顔は卵のような形で小さいです。」

番所の侍は林の中に落ちていた櫛を母親に見せました。

「ああ、それは真砂の櫛です。どこで……。結婚する時に私があげた物です。一昨日京都から若狭に帰る時、付けておりました。」

一人は若狭に住んでいるのですが、武弘様が仕事のためにしばらく京都に

来ていらつしやいました。娘も一緒でした。仕事が終わって若狭に帰るところでございました。

武弘様が亡くなってしまつて、真砂は生きていますのでしょうか。どうぞ娘を探してください。何があつても娘が生きて私達の所へ帰つて来ることを願つております。」

真砂の母が泣きながら帰つて行くと、番所には泥棒の多囊丸が連れてこられました。大怪我をしていて歩くのも大変そうです。

多囊丸の話

「痛い、痛い。俺が馬から落ちるなんて何ということだ。こんなばかごとになるなんて。あの馬は俺を乗せるのがどうしても嫌だと言っているようにひどく騒いだんだ。だけど、今まではどんな馬でも俺の言うことを聞いて、大人しくさせる自信があつた。それなのに気が付いたら落とされていたんだ。いたたたた……。あの馬は乗る者を選んでみるみたいだ。」

「そうだよ、あの侍を殺したのは俺だ。本当だ。でも女は知らない。どこかへ行つてしまった。殺してはいない。」

どうして侍を殺したか、ようし、聞きたいのなら話してやる。

一昨日の朝、天気がいいし、涼しい風が吹いていて、俺はなんだかひどく気分がよかった。そんな時に、あの二人に会ったんだ。」

「どこでかつて。京都の北へ行く街道だ。女は旅の笠をかぶっていて、その笠の上から薄い布を掛けていたから、顔が全然見えなかった。」

二人が俺の方に近づいた時、急に風が吹いてその薄い布がふわっと上がったんだ。それでちよつとだけ女の顔が見えたんだ。すぐに風が止んだからあつと言う間に見えなくなってしまった。あの風が吹かなかつたら女の顔を見ることもなかった。

だけどその顔は女の神様のようなだった。女神様だぞ。女神様は侍でも、

俺のような人間でも同じように優しくしてくれる母親なんだ。

母親のように温かく抱いて包んでくれるんだ。

女神様は一人の男のものじゃない。

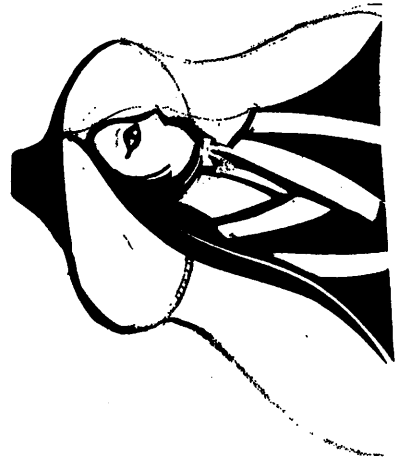
俺のものでもあるんだ。そんな女は

なかなか見つからない。

やつと会うことができたんだ。

だから俺のものにすると決めた。

男の方はどうでもいい。邪魔なら殺してしまってもいい。殺すことは簡単だ。刀で命を取る、それが殺すことだ。



ところが、侍や金持ちは金の力や嘘の言葉で人を殺す。汚い、汚い。
金をたくさん持っていて嘘をつくのが上手な者が、町のなかで一番強い者になるんだ。血も流れないし、命も取らない。しかし、そうやって金や嘘の言葉で殺された者はずっと苦しむんだ。体が死ぬまで、恥ずかしさや残念な気持ち
ちが長い間、心を苦しめるんだ。

「刀で命を取るのとどちらが悪いことなんだ、俺にはよく分からない。」
多襄丸は番所の侍にそう言つて答えを聞いているようでしたが、侍たちは早く話を進めるように言いました。

「分かった、分かった。どうして殺すことになったか、初めから順番に話

していくから待て待て。

「一昨日の朝は女だけ俺のものにすればいい、男は殺すことはないと思つていた。だけど、あの街道では人が通るからだめた。ずっと遠い山の中へ二人を連れて行つて、そこで女を取つてしまおうと思つた。」

「どうやって二人を山の中へ連れて行こうか。俺は考えた。泥棒だつて頭を使わないとすぐに捕まってしまうからな。」

しばらく考えて、俺は二人に近づいた。そして、できるだけ丁寧に話しかけたんだ。『あの、お侍さん、私は山で仕事をしている者なんですが、先日あの山のむこうで古い墓のような物を見つけたんですよ。どのぐらい古い物